

## リアルタイムで“異文化”語り合う—板坂ゼミ

### ベネチア大・日本文学専攻生とネット共同授業

文学部の板坂則子ゼミとベネチア大学の日本文学専攻生とのネットワーク利用共同授業が、6月7日に行われた。時差7時間の日本とイタリアを結んで2時間、日伊学生計54人がネット上で異文化について語り合い、終始和やかな雰囲気で“国際授業”が繰り広げられた。

文学部の「国際間のネットワーク利用共同授業」は、文科省のサイバーキャンパス整備事業の選定を受けており、ネットワーク情報学部の協力を得て、一昨年から韓国の檀国大学、イギリスのケンブリッジ大学など世界の大学での日本文学教員と共に活発に取り組んでいるが、ヨーロッパとの学生間共同授業は初の試み。授業はまずラウラ・モレッティ講師指導によるベネチア大学生が研究や卒論のテーマについて発表、続いて生田キャンパスから板坂ゼミ生が、日本の伝統文化とイタリアのそれとの比較について発表し、それぞれ質疑応答が行われた。



画面を見ながらベネチア大学生とネット授業

日本留学中のベネチア大卒業生のアレシア・チェラントラさんも生田キャンパスで参加。「ラウラ先生や先輩たちの様子をリアルタイムで見聞きすることができるなんて驚きです」と話していた。板坂ゼミ生は「日本語が上手。異文化を得ようとする姿勢も素晴らしい」(4年次生)、「変体がなや日本独自のダジャレ文学など、扱う研究が多彩。私たちと感性が近いこともうれしい」(2年次生)と、ベネチア大生の日本理解度に感心する一方、「速やかに的確に質問、応答するなど日本語を母語としていない外国人への配慮も必要」(2年次生)と、海外との授業に臨むにあたっての反省点も出た。

板坂教授は「今後はテーマを絞り込み、中身を深めての授業展開へと工夫していきたい。同時に他国の大学とのネット授業も積極的に行う」と早くも次への意欲を見せた。

同17日にはバルト三国のエストニアからネットワーク利用の遠隔地講義が生田キャンパスで行われ、文学部1年次生を中心にエストニア人文大学のレイン・ラウド教授から同国で進化する日本発「俳句」の授業を受けた。

## 《健康フラッシュ》

## 紫外線にご注意を！

昔は、日焼けした真っ黒な肌が健康の証明に思われていました。しかし今や、日焼けを起こす紫外線(UV-B)は、基本的に身体に悪いものと考えられるようになりました。日光に当たると、骨を作るために必要なビタミンDが作られますが、そのためには、1日に約15分間紫外線に当たれば十分であることがわかりました。紫外線の浴びすぎは、シミ、しわなど皮膚の老化や、皮膚がん、眼に対しては白内障などの可能性を高めることになってしまいます。

UV-Bの多くはオゾン層でさえぎられるのですが、フロンなどによるオゾン層の破壊により、地表に届くUV-B量が増え、紫外線の害が増えることが危惧されています。有効な紫外線対策としては、日焼け止めクリームを活用、日傘・帽子・UVカット機能付きサングラスの利用、長袖シャツの着用などがあります。帽子をかぶることで、目に対する紫外線量は20%減少し、UVカット機能を持ったサングラスを装着すれば90%減少するとされています。

紫外線量の年間平均は北海道より沖縄の方が多く、季節では6月から8月が、1日の中では午前10時から午後2時ごろがもっとも紫外線が強くなります。曇りの日でも紫外線は降り注ぎ、薄い雲では紫外線の80%は透過します。紫外線の反射率は、草地や土では10%以下ですが、砂浜で10~25%、新雪では80%と高くなります。また、山など標高が高いところは紫外線が強くなります。

これらの性質をよく理解して、夏を楽しく過ごしてください。

(保健室)

## 教務課からのお知らせ

### 修学状況通知書の送付について

教務課では、学生の修学状況(履修科目、学業成績、出席状況等)を例年7月中旬に保証人の皆さまにお知らせしてきましたが、本年4月より「個人情報の保護に関する法律」が全面施行されたことに伴い、保証人への修学状況の開示が第三者への情報提供となることから、送付については学生本人の同意を得ることが必要となりました。

修学状況通知書の郵送に同意しない旨、教務課窓口申し出のあった学生の保証人に対しては、今年度から通知が郵送されませんので、ご承知おきください。

※外国人留学生の皆さんには本人にお渡しいたします。

## 《学部発信》

# 経営学部—全国初！ 一般入試の選択科目に教科「情報」を導入

2003年度から高校教育において普通教科「情報A」、「情報B」、「情報C」が設置され、そのうちの1科目を選択必修として学習することが義務付けられた。そうした科目を履修した高校生が初めて大学入試を受けるのが、来年2月である。



経営学部では、他学部や他大学に先駆けて、06年度一般前期入学試験のA方式およびB方式の選択科目に教科「情報」を加えることを決定し、現在その準備を進めている。日本史や世界史と並んで「情報」を選択出来ることにしたわけである。東京農工大、千歳科学技術大学、東京情報大などでも、専門科目としての「情報」の試験を行う予定であるが、一般入試の選択科目として実施するのは、現時点で見ると、本学経営学部だけである。

### ◆導入の目的

目的は三つある。その第一は、「情報」に関心のある学生を多く入学させ、マネジメントとITに優れた人材を育成することである。第二は、選択科目の多様化を望む受験生のニーズに対応することである。第三は、大学入試への導入によって、高校における情報教育の推進を側面から支援することである。03年8月に高校を対象に行った我々のアンケート調査でも、一部の高校、特にいわゆる「進学校」では、大学入試に無関係な教科である「情報」の教育は等閑にされているという回答が多数あった。そうした状況を改善するには、入試への導入が最も有効であろう。

### ◆情報教育重視の伝統

1962年の学部設立時から情報教育を重視し、64年にはいち早く「電子処理コース」を設置して、コンピュータ教育を開始した経営学部は、72年には「電子計算機総論」（現「コンピュータ概論」）を必修科目にして、学部生全員にコンピュータの学習を義務付けた。当時の文科系学部としては画期的な試みであり、今日の高度情報化社会の到来を見据えた教育方針であったといえる。情報教育の重視は経営学部の伝統になっており、現在でも多数の情報関連科目を設置している。文科系学部にもかかわらず、いち早く01年度には「情報科」の教職課程を設置した。大学院経営学研究科で「情報」の専修免許を取得出来るのも、文科系大学院としては稀有なことである。

### ◆模擬試験の実施

昨年12月に経営学部の1年次生に、今年3月には首都圏の公立高校4校の生徒を対象に模擬試験を実施した。そして、6月26日に行われた体験授業フェアでも模擬試験を行った＝写真。これらの試験結果を分析して、本番の試験問題の作成に参考となる多くの情報を収集出来たところである。

### ◆「情報」入試は普及する

大学入試センターが、03年春に「当面は『情報』を出題しない」と決定しているが、我々はそう遠くない時期にセンター試験に導入されることを確信している。政府のIT戦略会議で「センター試験への情報出題」を提言している、東大、京大などの国立大学（旧帝大）が「八大学情報入試ワーキンググループ」を設置して、「情報」の導入を検討し始めているなど、センター入試への導入を予兆させる事柄が発生しているからである。そうなれば、「情報」入試は、即座に全国の大学に普及するであろう。

経営学部の試みは、まさに「世に先駆けし我等が大学」を実践するものである。

（竹村 憲郎）

